M. Hotsuse

その年、塚本大祐は沼田城下の新陰流の師範、辻茂吉から目録を得た。目録とはその流儀を一通り納めた者に与えられる書状である。

茂吉の父、茂右衛門は天下の御指南役、柳生宗矩の高弟で、厩橋藩の酒井家の剣術指南役であった。その子の茂吉は酒井家に縁がある沼田藩主、真田信利に請われこの沼田城下に十年前に来た。馬廻り役と兵法指南役を仰せつかった。

しかし、真田信利という男は移り気で放埒な性格で、藩主になったばかりの時は善政を行っていたが、次第に政治に興味を無くして重臣達に任せきりにするようになった。
その昔、真田藩祖の信之は、徳川家康から安堵された旧領を松代藩七万石と沼田藩二万五千石に分けた。
信利は信之の孫で沼田藩三代目である。直系だという矜持と野心もあって、いつしか真田家を再び一つにまとめ、そこに君臨する夢を見ていた。
信利は松代藩主で叔父の信政が死んだ時、幕府に松代藩の家督を継ぐ権利があることを訴えた。だが、信政は自分の庶子である幸道を遺言で、次代の藩主に指定していた。
松代藩の家督をめぐって、直系の信利と正室の子でない幼い信政の子との争いになったのだ。
信利の性格とその家臣団を知る本家の家臣達は、信利を受け入れなかった。信利は幕府に訴えて係争になった。幸道の家臣達は、信利が松代藩主になれば全員切腹する、という連判状を幕府に提出した。
結局、信利は敗訴し、松代藩を手に入れられなかった。信利はますます自分の世界に耽り、剣術などに目もくれなくなった。よって茂吉の役目は城中では殆ど無く、道場での門下生の育成に携わっていた。

信利は虚栄心を充たすために、沼田城の改築や寺社の建立、江戸屋敷の改修など財政を顧みずに金を使うようになった。そのため、閣僚達は度重なる重税を百姓に課していた。三万石ほどしかない石高なのに虚偽の検地を行い、十三万石を宣言した。狂気の沙汰である。
何故このような事が可能だったのだろうか。信利は領民の怨嗟の声を無視し、言う事を聞く家臣のみを身近に置き、彼らに権力を与えていたのだ。遠ざけられた家臣達は黙して忍耐の時に入っていた。

天和元年（１６８１）の夏、沼田領は特に暑く、暗鬱とした雰囲気が満ちていた。

大祐の父、塚本舎人（つかもととねり）は、高々三百石の家臣であったが、信利の信頼を得て側近中の筆頭となった。その盟友である普請奉行の麻田権兵衛、御金奉行の宮下七太夫の三人で、一千石以上のの五人の家老を押しのけ、執政をしていると言っても過言ではなかった。
大祐の幼い頃は皆が機嫌を取ってくるのでこんなものかと思っていたが、財政が破綻し領内が殺伐としてくると憎しみの目で見る者が出てきた。父と外を歩いている時、斬りかかられたことがあった。その時は大事は無かったが、大祐は新陰流の門を叩き、剣術に没頭した。

二十歳（はたち）の大祐は、目録を得た達成感はあったが、心底から喜ぶことは出来なかった。日に日に悪くなる父の評判に、気が重かった。

今の父は昔の優しかった父ではなかった。城中の評議で、幕府に納めなければならないケヤキの大木三十本をどうするのかと、日夜怒鳴り散らしているようだ。八月に納めなければならないのにまだ八本しか伐採出来ていないという。
これは去年、関東地方を襲った長雨で倒壊した江戸の両国橋の掛け替えを行うために、幕府の御用商人、大和屋久右ヱ門と三千両で契約したものだった。条件は末口二尺七寸（約８０センチ）以上、長さ九間（約１８メートル）のケヤキの大木であった。
森林の豊富な沼田領であったが、信利の散在を支えるために、良木はとっくに刈られていた。簡単に条件のケヤキが伐採出来ると考えたのは、現実を知らない官僚ばかりだった。大和屋から金を前金で受け取ったが、それは直ぐに今までの放埒財政の負債の返済に消えた。後は農民を駆りだし、馬車馬のように働かせるしかない。
戦国時代の勇、真田昌幸以来の善政の記憶は領民の頭から失せようとしていた。

大祐は六尺近くの体躯で寡黙な男であり近寄りがたいところがあったが、父の威を借りるような暗愚ではなかった。権力を持つ、他の二人の重臣の息子達も聡明であった。
幼なじみでお互い気の置けない親友となっていた彼らはある時、領内を旅して周り、その農民の苦しみを知った。
はじめは遊興の温泉廻りの筈だった。各地の温泉は森林の伐採地の近くにある。そこでは代官の命令で、奴隷の様に働かされている農民がいた。彼らの侍を見る目は憎しみに満ちていた。
旅の後、彼らは危機的な状況が来る事を予感した。
大祐の父を暗殺する計画もあるという。だが、藩主の信利自身があの調子だから、父が死んでもどうにもならないだろう。
どんなに悪臣であると言われても父は父だ。父がいなくなって信利に歯止めがさらに掛からなくなったら最悪ではないか。
大祐は剣を以て父を守ろうと考えた。

一心に修行したお陰で、人の心が多少読めるようになったと大祐は思った。父を守るために常に気を張っていたことは、天賦もあったのだろうが、大祐を一代の剣士にしたようだ。

ある日、辻道場に新入の門弟が入った。

新入とは雖も、辻の甥で江戸の柳生新陰流の道場で修行してきた者と言う。
その初稽古の日、下に数十名の門下生が居並び、上の上座に辻茂吉、その両側に大祐を含む高弟四名が正座をしていた。
茂吉の前にその新入の少年が深々と平伏していた。開け放たれた道場の両側の濡れ縁の戸口から涼風が吹いた。
顔を上げると、横隅に座する門弟達と両侍の高弟達がほおと溜め息を突く。一人中央に座って姿勢を正すと、その秀でた容姿が一段と輝くようだ。
その若者のかんばせは芙蓉を思わせ、興福寺の阿修羅の様な怒りの眉に凛とした流線の眦（まなじり）。月代は剃っておらず、長髪は腰まで流れる寺小姓姿。前に突く手と手首の柔らかさから、残る幼さが感じられる。
歳は十四、五の匂うような若衆であった。

「叔父上・・・お世話になりまする」
「鈴（すず）、列堂様はお元気か？」
「はい・・・柳生の庄のお寺と江戸屋敷とをお忙しく飛び回られております」
「三厳様（柳生十兵衛）がお亡くなりになって三十年、その剣技の妙をお納めになったのは列堂様しかいらっしゃらなくなった・・・宗冬様はまだまだ・・・江戸柳生もこのままではのう」
「はい・・・尾張柳生の連也斎様は石舟斎様の再来と言われていらっしゃいますが、剣理を練る事のみにご執心で天下の兵法にはご興味無いよう」

皆がおおうとどよめく。
このまだおなごに近い青二才が、天下の兵法を口に出すとは。
確かに柳生新陰流の宗家は石舟斎の嫡男、宗矩ではなくその孫の兵庫に与えられた。宗矩は江戸の徳川幕府の重鎮となり、兵庫は尾張徳川家に伺候し、東西にその流派が別れて伝わる事となった。その後、江戸柳生と尾張柳生と呼ばれ、巷間では何かに付けて比較される事となる。鈴太郎の言動は江戸柳生の矜持から出たものだろう。
茂吉はにやりと笑うと、
「鈴太郎。その修行のほどを見せてみい。大祐、相手をしてやれ」
ここでまた大きなどよめきが湧いた。目録を受けたばかりと雖も、大祐の腕は城下一ではないかともっぱらの噂である。
二人は師の前で相対して正座した。

鈴太郎は袋撓（ふくろしない）を前に置き、正座して礼をする前ににこりと大祐に微笑んだ。可愛らしい子供のように。
大祐は思った。
（よほど自信があるのか）

新陰流の稽古には試合の他に一連の型稽古がある。
格の上の者が打太刀（うちだち）となり、修練する者の使太刀（しだち）に勝ちを取らせ、正しい勝ち口（勝つ方法）を教える稽古で、『組太刀（くみだち）』と言う。

だが、この組太刀は『形の上』の勝負ではあるが、使太刀の修練のほどがくっきりと映し出される。
足の運び、掛かり（斬り込み）の具合、打ち込みの絶妙さでその腕が分かるのだ。
打太刀が本気になって打ち込む場合、真剣勝負と同じ速度で撓が振られる。ぼやぼやしていると無様に打たれる事になる。それは形式なのだが、真に使太刀が打ち勝つ事は並大抵の事では無い。
組太刀が出来る様になると打太刀を常に制圧できるようになる。そしてそれが白刃の下で平常心で行えるまでに高めて行く。境地に達すれば殺し合いの中でも平然と技を繰り出すことが出来る様になる。これを鷹を躾ることになぞらえて『鳥飼の間（ひ）切り』と言う。

打太刀の大祐がゆっくりと撓（しない）を取ると、少し遅れて鈴太郎が取る。教えを受ける立場の使太刀は、打太刀に少し遅れて従う。
正座からお尻の下に踵（かかと）を立て、右足から前に出し、立ち上がると左足を揃える。
最初は足先を少し開いた自然体の位（くらい）である。撓を持った両手はまだ前に下げている。
鈴太郎の肩が、ゆっくりと右後ろに旋回して撓も後ろに向く。
組太刀『三学円の太刀』の初太刀、『一刀両段』の『車の構え』である。鈴太郎は左肩越しに大祐に目付を取る。
大祐が鈴太郎の動きを見てから撓を右肩に上げ、左肩を前に出して半身（はんみ）になった。一つ気を入れ、肩と共に出した左足から前に踏み出した。撓を右上に掲げたまま、左半身になって歩み寄る。足の先の指は上に反らせ、足の裏全体を床に付けて歩く『足陰を踏む』習いである。
（作者注　半身とは偏身（ひとえみ）とも言い、例えば右足、右肩を前に出し体の半分を相手に向けて構えること。）

鈴太郎の目が遠くを見るように微動する。
大祐の目、肩、拳の動きを流れるように見ているのだ。
普通の稽古ならば、大祐は少し気を抜いて歩み寄る。未熟な使太刀の者が打ちやすくしてやるのだ。だが、今は鈴太郎の技量を測るために演武をしている。師匠がそう言った。
大祐は殺気を発しながら間合いを詰めていった。それが大祐から稽古を受けた事がある門弟達には分かる。自分達を相手にするいつもの大祐ではない。誰かがごくと唾を呑んだ。
対する鈴太郎は落ち着いていた。組太刀では使太刀が必ず勝つ。そう考えているのだろうか。
鈴太郎は腰を低くした車の構えのまま大祐を待つ。
体を前に出した左足にやや掛け、右足を後ろに大きく引き伸ばしている。
現代で言えば丁度、氷上のスケーターが前足の臑を氷に対して直角に踏んで、後足を真っ直ぐ斜めに伸ばして滑る格好だ。つまり膝の揺らぎなどが無く、どこまでも安定した姿勢なのだ。
と言っても、必要な時は後ろ足の踵を支点にして、臨機応変に前後に動く事が出来る。

鈴太郎が上目遣いで大祐を睨む。風で乱れた前髪が涼やかに額と目に掛かっている。
目が合った。大祐は一瞬見とれた。
（美しい・・・おなごに生まれた方が良かったじゃろう）
その一瞬の心の隙間を突いて、鈴太郎の口が笑った。

（何！）
　瞬時に大祐は勝負の心に戻った。相手に油断を悟られた自分への怒りが湧き上がる。八相の構えから鈴太郎の左肩を、凄まじい速度で袈裟切りに斬り付けた。
　大祐の左半身から斬り込むので、後ろにあった右足があっという間に踏み出され、それに連れて右肩が周る。その動きを瞬時に見とって、鈴太郎の撓が素早く顔の前に引き上げられ、弧を描いて斬り下げられた。
　新陰流でいう『合し打ち』の妙技である。
　先に打太刀に打ち掛けられても、一瞬後から動く使太刀の撓は打太刀の撓の上に打ち乗り、その太刀筋を弾いて拳を切る。
　だが真剣の場合はそううまくは行かないだろう。重い金属の塊はそう簡単に弾（はじ）く事は出来ない。厚みも違う。相手の斬り方によって打ち乗れるとは限らない。敵の修練が高ければそれだけ、斬り合えば相討ち、下手をすれば斬られてしまう可能性がある。
　双方ただでは済まない。敢えてそのような決死の状況に自らを置く。
　このような技を最初の初太刀で教えるとは、恐ろしい流儀である。

　鈴太郎の撓は、大祐の撓が彼の左肩に当たる寸前にそれに打ち乗った。
（ほう・・）
　大祐は力を緩めて、鈴太郎に二の斬り（打太刀が再び右八相に構え、使太刀は打太刀の左手を狙って残心を取る）を取らせてやる。
　大祐は感心していた。
　一瞬心を奪われたことに熱して、ぎりぎりのところを打ち込んでしまった。他の門弟ならば打ち乗るのが間に合わず、大祐に『斬られて』しまったに違いない。
　それをちゃんと制したのは、鈴太郎がその歳に似合わぬ腕を持っていたからだ。
　その証拠にその後の演武にも、鈴太郎は揺るぎない打ち込みを見せた。

数日が経った。

鈴太郎は、道場の隣の辻家の屋敷の離れに部屋を借り、毎日の修行をはじめた。歳が若くても目録を取ろうと思えば取れるほどの技量ということで、鈴太郎が道場に出て行くと、門弟達は鈴太郎に打太刀を請うた。
一人の相手をしている間、その前には順番を待つ行列が出来るほどだった。鈴太郎は年上の者には礼儀を尽くして教えてやる。その教え方が親切でうまいと評判になって、ますます教えを請う者が増えた。
大祐の稽古は、どちらかというと容赦をせぬので、年季の入った高弟達が専ら相手であった。

「もう、少し休ませて下さい！皆さんにばしばし打たれるので手が腫れてしまいました！」

高い透き通った声は男臭い道場で、すがすがしく通る。門弟達が笑う。打太刀は合し打ちで使太刀に手首や拳を打たせるのだ。皮製の籠手を付ける場合もあるが、鈴太郎は歳上の門弟達への礼儀から付けなかった。
鈴太郎が道場の隅に行って汗を拭きながら座った。その横に大祐と使太刀の者が稽古をしている。
汗を拭きながら鈴太郎はその稽古を眺めた。

大祐は鋭い視線に晒されたような気分になってどきっとした。横目で見ると鈴太郎がこちらを見ている。殺気が一瞬その目に走る。
（俺の稽古から盗むつもりか！）
古武道の教えは基本的に『口伝』であり、師が弟子に直接稽古の中で伝えるものだ。だが、全て伝わるとは限らない。口では教えられないことがある。門弟はそれを『盗む』必要がある。うまく出来ないところや教えてくれない勘所を、上級者の稽古から吸収するのだ。

（良いだろう！盗んで見よ）
道場はお互いに研鑽する場であるから、盗まれる事を厭（いと）んではいけない。だが簡単には盗ませぬ！
心が一所に留まらない完璧な演武は、却って盗む事が困難になる。流れるように体が動き、未熟な者には、どこを盗めばよいか分からなくなるのだ。
周りの者も大祐の動きに見とれているようだ。終わって礼を終えるとほうという溜め息が流れた。

「大祐！」
道場の帰りに後ろから、幼なじみの宮下熊之介が声を掛けてきた。こやつは剣は駄目だが、女との浮き名は有名だ。沼田藩の金奉行の父、七太夫は大祐の父の盟友だ。二人とも沼田藩で権力を握っている。だがこの息子達はあの沼田領の現状を知った旅以来、親の威を借りるような言動は一切していなかった。真の武士とは、親が武士だから武士となるのではないのだ。
「何だ」
「お前・・・知ってるのか？鈴殿の目を」

「目？」
　熊之介はにやりと笑って、
「やはりな・・・色気の無いお前の事だから分かってないと思ってな。教えてやろうと思って来たのだ」
　大祐は面倒くさそうに、
「何を教えるというのだ。女には興味はない。俺には剣だけで良い」
「女には興味がないか・・・では男はどうじゃ？」
「何を言っておるんだ！お前は！」
　大祐は顔を真っ赤にして叫んだ。
「お前は・・・鈴殿がどのような目でお前を見ているのか分からんのか？」
「す・・・鈴太郎殿が・・・？」
「もっぱらの評判だぞ。鈴殿の稽古をしておるお前を見る目は・・・」
「？」
「お前に惚れとるぞ」

　大祐の心臓はどきんと鳴った。腰の大刀の鯉口を切る格好をして、
「ふざけた事を言うとお前とて斬るぞ！」
　熊之介は飛び退いて指を振った。
「それそれ・・・なんじゃ、お前もまんざらでは無いのじゃないか」
「去（い）ね！」
「鈴殿を狙っている輩は多いぞ！早々に念者にならんと取られるぞ！」
　ははははと大笑いして去って行く熊之介の後ろ姿を、大祐はずっと睨んでいた。

（鈴太郎は熱心に俺の稽古を見ているだけではないか！・・・儂にも色欲ぐらいはある！しかし男などと！）
　屋敷に帰り、飯を喰らうと大祐は自室に引いて心を鎮めていた。確かに鈴太郎の美しさは尋常ではない。それを追う衆道達は多いだろう。しかし所詮男！衆道どもは糞だらけの穴に一物を突っ込むという。冗談じゃない！それに裸にしたらごつごつの肉体でそこで興味も何も無くなるだろう。

　大祐は、元服した十六の時に、悪友の熊之介等に連れられて花街にはじめていった。そこで筆下ろしをして貰ったのだが、期待したほどの味わいではなかった。女は可愛いが剣に夢中の大祐には何か物足りない。話題も剣の話をし出すと欠伸が出る。
（本当に好きなおなごであれば一入（ひとしお）かも知れぬが・・・）
　それから今まで数回行っただけだった。それでもやはり男の機能は盛んなので、自ら処理をしていた。熊之介に貰った色本を戸棚から出して、まぐわいの場面の図を広げ手淫をしはじめた。
（うう・・・）
　その頂点に辿り着こうとした時、大祐の脳裏に一人の美しい者の顔が浮かんだ！
（す・・・鈴！？）
　その時、大祐の子種を注ぐ対象は明るく微笑んだ鈴太郎であった。

　それから大祐は道場に出ても鈴太郎を無視しようとした。

　門弟どもがひそひそと話をしていると、自分と鈴太郎の噂をしているように思える。鈴太郎も顔を合わせると慇懃に礼をするだけだが、確かにその後ちらと流し目を送る。
　その目がなんとも妖艶だ。
（い・・・いかん！これでは剣の修行が出来ぬ！）

「お相手下さいませ！」
　突如、鈴太郎の顔が降って来たかのように思えて、大祐はぎくっとした。大祐の相手がいなくなったのを見計らって、稽古を願い出たのだ。
「う・・・うむ。よかろう」
　『燕飛』の組太刀を行う。この組太刀は六つの型を続けて使う。打太刀、使太刀の攻守が連綿と続くのだ。
　殆どの門弟達は物見高く、道場の隅に座り二人の演武を見ていた。
「う・・・わ。見事」
「まるで舞を見ているようじゃ」

　鈴太郎は完璧な使太刀を演じた。その足腰の動きとぴったりと同期した肩と腕の動き。どこまでも安定した鋭い打ち込み。退く時も、あらかじめ決められた形に嵌め込んだようにすすと引く。それに釣られた形で大祐の動きも滑らかだ。
　まるで息の合った『兄弟』のようだ。
　稽古の最後に、師の辻から数人の高弟達が直心影流の居合を習う。鈴太郎もそれに加わっていた。既に誰もそれを不可思議とは思わなかった。

　明るい性格の鈴太郎には、誰もが道場で声を掛けたくなる。稽古の合間に、道場で笑い声が鈴太郎の周りに絶えなくなった。
（・・・慢心しているのではないか）
　父の評判に心を痛めている大祐は、少しばかり腹が立っていた。常に将来の不安を感じているので、明るく笑っていられるということが妬ましい。
　しかも、あの時に鈴太郎の顔が無意識に頭に浮かぶという自分が許せない。

「大祐様、お相手をお願い致します」
　また鈴太郎が請うて来た。

「今日は『間（ひ）きり』をやる。良いか？」
　鈴太郎は一瞬躊躇したようだ。だが、すぐに、
「はい。喜んで！」

　『間きり』稽古とは組太刀ではない。
　打太刀が使太刀に稽古を付ける形ではあるが試合に近い練習法で、打太刀は、多種ある組太刀の攻めの形から、その時の判断で使太刀を攻める。使太刀はそれを教え通りに受け、攻撃に転じ

なければならない。問題は、打太刀が止めるまで延々と続く。使太刀は疲れふらふらになって、最後は打太刀に打ちのめされることが多い。門弟の中では恐怖の稽古だった。
　大祐は右八相、左八相から鈴太郎の首、肩、肘、拳、臑を狙って凄まじい打ち込みを開始した。
　鈴太郎は、左肩に打ち下ろされた撓を弾くとその反動を利用して、左肩の上に自分の撓を掲げ、左足を踏み込んで大祐のこめかみ当たりに『返す』。大祐はそれを撓で受ける。
　真剣を持った時と同じ攻撃をしなければ稽古の意味は無い。この場合、『返す』時は手首を使ってはいけない。体全体を使って、振り上げて斬り下げる時と同じ弧を描き、刀の『もの打ち』（真剣の切っ先から三寸ほどの最も斬るに重要な部位）から打太刀に当てなければならない。
　二、三回、撓で鈴太郎の返し打ちを受けていた大祐は何を思ったのか、自分の振り上げた手首で直に受け始めた。
「もっと強く打て！」
　鈴太郎の打ち込みが弱いと言っているのだ。
　眺めていた門弟達はびっくりした。鈴太郎本人も恥ずかしさを感じたのか、うぬと言ってそれまで以上に激しく打ち込み始めた。

　袋撓は、皮で出来た袋の中に縦に先を細かく割った竹が入っており、それで叩かれてもそれほど痛くはない。しかし剣を極めた者が振れば、その肩、腕、肘、手首が袋撓と一体となり、彼の全体重が乗ったまま当たるために、かなりの衝撃がある。

　だが十数回、続けていると鈴太郎の顔が歪んできた。息が激しくなり、額から汗が流れる。乱れた前髪が頬に張り付き、幾筋かが口に入る。その真剣になった顔は興福寺の阿修羅像のように妖艶だ。
　鈴太郎は大祐の右手を打つと、逆青眼（左半身になって刀を斜（はす）に寝かした構え）に構えを取り直し次の攻撃を待つ。息が上がっている。大祐は鈴太郎の前に出た左足に、撓を打ち下ろした。
「う！」
　撓を横下に落とすように左臑の側に付けて防がねばならなかったが、受けるよりも先に大祐の鋭い打ち込みが入った。門弟達の幾人かは過去これを喰らって足が腫れ、歩けなくなった者もいる。
　鈴太郎は歯を食いしばって耐えた。撓を振るい上げ、右上から大祐が引き上げた左腕に返した。だが足の動きが止まり肩が廻っていない。初心者の様な打ち込みだ。

「馬鹿者！」
　大祐の怒りは、重い逆の袈裟切り（左肩上からの斬り下げ）となって鈴太郎の右肩に落ちた！
「あっ！」
　鈴太郎は大祐の打ち込みの激しさに足を滑らせると、右肩を下にして床に倒れてしまった。
　おおとどよめく声がしてその直後、静寂が訪れた。
　鈴太郎は、右肩を庇って、倒れたまま大祐から離れようとした。恐怖に駆られていた。
　熊之介は丁度その場に居合わせた。最初、うまくやっているなと思いながら、大祐にもやっと春が来たよと見ていたが。
（・・・大祐の奴！全く風情の無い奴よ！）

　大祐は、仁王の様に立ちつくして鈴太郎を睨んでいる。その横に走り出て鈴太郎を庇った。
「大祐！今日はこれで許してやれ！・・・鈴殿、大丈夫か？」
　大祐も我に返っていた。
　自分のしたことが恥ずかしくなった。鈴太郎はまだ幼いのだ。二十を超えた自分達とは体力が違う。
　だが、謝ることも出来なかった。
　自分は正しく教えていたはずだった。鈴太郎がこんなにも脆いとは。

　鈴太郎が左手で右肩を押さえながら、大祐の前に跪（ひざまず）き、必死に言った。
「大祐様！・・・申し訳ありません！鈴は慢心しておりました。まだ未熟でした・・・」
　高弟達も集まってきて鈴太郎を囲み、労って立たせた。
「鈴殿、今日は上がりませい。調子が悪いのではないか？」

　鈴太郎は、訴える様な潤んだ目で大祐を見ながら、門弟達に支えられてよろよろと休養所に歩いていった。皆もしらけたように大祐を見た。

　大祐は道場の一番隅に行くと、そこに正座し稽古が終わるまで瞑想に耽った。

「鈴殿、泣いていたぞ・・・」
「健気な・・・ちとは優しくしてやればよいものを・・・」

　こんな門弟達の帰り際の呟きが聞こえたような気がした。そして道場はしんと静まりかえった。
（これでいい・・・）
　大祐はもう鈴太郎に惑わされる事はないだろうと考えた。
　嫌われただろう。
　憎しみの目で見られるのは慣れている。父がもし失脚したら門弟の内、何人かは敵となるかも知れない。
　俺はその時は躊躇無く、そいつらを斬り殺すのだ。

　大祐は汗を流すために道場脇の井戸に向かった。もう薄暗くなっている。
「！」
　井戸端には誰かいる。今日は師匠は珍しく登城していて、家中は皆ついて行っている。住居の離れには下女がいるが、道場にはもう誰も居ないはずだ。いるとしたら・・・

　果たして鈴太郎だった。
　釣瓶で水を汲んでいる。右肩を庇いながら。大祐が近づいたことは気付かない。大祐は去ろうかと思ったが、何故か鈴太郎の様子にそこに釘付けになっていた。
　思い詰めたような顔で、その動作は放心したように弱々しかった。それでいてどこか優雅で男のぎごちなさは無い。
　鈴太郎は大祐に背中を見せながら汲んだ盥（たらい）の前に膝を突き、右肩から小袖を落とした。そして大祐に打たれた当たりに水を吸った手拭いを当てる。
「！」

　鈴太郎が気配に振り返った。
　大祐と目が合う。大祐は電撃に打たれたように身が震えた。鈴太郎も吃驚した顔で固まっていた。
　大祐の目は、鈴太郎の妖艶な裸の半身に見入った。白雪のような肌にあったのは、鎖骨から右の乳首まで引かれた紅い傷跡であった！
「そ・・・それは・・・？」
　大祐は自分が付けたのではないかと心臓がどきりとした。
　鈴太郎ははっと気付くとおなごがやるように両手で胸を覆った。そして下を向いて膝を閉じて突いた。

　大祐は思わず濡れ縁から飛び降りて、鈴太郎に駆け寄っていた。鈴太郎はさらに身を懐いて横を向いた。
「こ・・・れは、貴方様が付けた傷ではありませぬ！」
　大祐は片膝を鈴太郎の前に突いて、そっと鈴太郎の手を右肩から外した。白い肌がどんどん上気してくるのが分かる。そしてその傷は夕闇に妖しく紅く映えた。

　鎖骨の上についた傷はそれが一旦、両断されたことを示していた。再び接合するのに時間を要する筈だ。
「この傷はまだ新しいではないか・・・その体で稽古に出ていたのか・・・」
　大祐は自分が間違っていた事を悟った。

大祐は鈴太郎に彼の部屋に導かれた。

断ろうとしたが、鈴太郎の目はそれを許さなかった。
部屋はこぎれいに片づけられ、書台には沢山の漢籍（漢文の書）が積み重ねられている。ほのかに香の匂いがした。
「・・・許せ。まだ体が癒えておられないのに儂は馬鹿な事をした・・・」
鈴太郎は大祐の前に手を突き、身を低くし見上げて言う。
「いえ！大祐様。決してお恨みなど致しませぬ。皆にちやほやされ、気が大きくなっておりました・・・真剣に修行なされている大祐様にご無礼を致しました・・・」
「傷をお労りなされ・・・これで失礼する」
鈴太郎は必死にすがった。
「お待ち下さい！大祐様にお近づきになれたのが嬉しゅう御座います！なにとぞ拙い茶を入れますのでどうか・・・」

鈴太郎は大祐の前で茶釜に火を熾し、裏千家の作法通り茶を点てた。どうしようかと迷っていたが、その端座する愛らしい姿を今は心から賞味しようと大祐は思った。茶筅を振るその手と指は華奢で、とても撓を握る手とは思えなかった。

茶を啜る大祐に鈴太郎は言った。
「大祐様・・・この傷のことをお話ししたいと思います」
「傷の・・・？」
「はい・・・誰よりも大祐様に聞いて欲しゅう御座います・・・」
大祐は椀を下げて驚いた顔をした。
「私は江戸にいる頃、『義兄（あに）』を持っておりました」
「兄を・・・」
兄（義兄）とは衆道の年上の念者のことである。

鈴太郎は徳川家の旗本の五男であった。
容姿に優れ利発であった故に、小さな時から年上の男に誘われたが、文武に優れた人でなければと断り続けた。六歳で新陰流を習うようになると、天賦の才であろうか、若年ながら鈴太郎に打ち勝つ者は居なかった。

だが一年前に長州藩の江戸詰家臣の次男である三宅三十朗という若い武士と惚れ合い、契りを結んだ。
三十朗は、柳生石舟斎の弟子だった柳生松右衛門が残した長州藩に伝わる新陰流分派の使い手だった。江戸詰になったことで本家である江戸柳生の道場を訪れていたのだ。
二人はお互いに研鑽しあい高めあい、そして愛し合った。鈴太郎にとって至福の時であった。

だが、鈴太郎に横恋慕する輩があった。同じ幕府旗本の鬼芦陣内であった。強引な陣内と三十朗は争った。
ある夜、三十朗が鈴太郎の家から帰るところを陣内は襲った。だが三十朗は剛の者、陣内を一刀のもとに斬ってしまった。そして三十朗はそのまま江戸を逐電し、故郷の萩に向かった。

長州藩の江戸屋敷は幕府におもねるため、三十朗を藩籍から除いてしまった。牢人となった三十朗には萩に帰っても、もう落ち着くところは無かった。
鈴太郎は老中の大久保忠朝の屋敷に駆け入り、自分の手で三十朗を引き戻し、幕府に自首させる旨を願い出た。陣内の家族に仇討ちをさせるよりは合理的な解決法だった。上意が下った。

だが、鈴太郎は三十朗を誰の手にも掛けさせる気はなかった。慶安元年（１６４８）に衆道は幕府に禁じられていたが、それは風俗の若衆狂いを禁じたもので、さむらい同士の契りは未（いま）だ重さを保っていたのだ。
江戸柳生道場でその若さと剣技を評価されていた鈴太郎は、『義兄』の三十朗を説得出来るだろうと誰もが考えた。こんな可愛い『義弟』の言う事ならばむげに出来まいと。
かくして鈴太郎は三十朗を追った。

「やはりお前か・・・」
無精髭を生やし、埃だらけの旅姿の三十朗は鈴太郎を見て懐かしそうに微笑んだ。
「よく来てくれた」
「兄上！」
二人はお互いに八相の型を以て斬り結んだ。
稽古では拳を斬るが、それよりは半歩踏み込んで、お互いの肩口を斬ったのだ。しかし稽古ではない。
二人は同時にその修行した妙技を振るった。
相手の刀に打ち乗り勝つのではなく、防ぐこともなく、二人であの世に行くためにその愛する者を斬ったのだ。
三十朗は雁金に首根を断たれ、鈴太郎は右鎖骨を断たれて倒れた。
だが運命の神は冷たかった。鈴太郎は付いてきた家の者の手厚い看護で命を拾ったのだ。

「・・・私は江戸にはいたたまれなくなり叔父を頼って沼田まで逃げて参りました」
「・・・三十朗殿は会心であったであろう。他の誰でもない御身に討たれたのだから」
「・・・私は死にきれず、ここに醜態を晒しております」
鈴太郎の目から大粒の涙が落ちた。そして体が崩れ落ちそうになった。大祐は思わず鈴太郎を懐いてしまった。
「大祐様・・・」
鈴太郎は怯えた目を下から向ける。
「鈴殿・・・儂を御身の『兄』にして貰えるだろうか？」
「え・・・私の兄に・・・？」
「・・・別に契ろうと言うのではない。ただ、御身の心の支えに少しでもなれたらと」
鈴太郎はぽかんと口を開けて大祐を見た。そしてまた涙を流し、
「嬉しい！」
大祐に抱きついた。そして二人はおずおずとその唇を合わせていった。

稽古のはじめと終わりに、楽しそうに話しながら歩く大祐と鈴太郎の姿があった。やっと鞘に収まったかという者があれば、失恋に肩を落とす者もいた。

ある日、稽古の後に大祐は鈴太郎の部屋を訪れ茶を飲んでいた。
そこにばたばたと離れに駆け込む者が。部屋に息せき切って来た者は大祐の下人の次郎兵衛だった。
次郎兵衛は倒れ込むように大祐の前に座ると、一息突いて、
「若！た、大変です。お父上様が！」
「何！襲われたか！」
「いえ・・・」

鈴太郎は急いで下人の次郎兵衛に白湯を与えた。
「伐採した木材を視察するために、月夜野村の真庭政所に行かれ・・・」
「それでどうした！」
「そこであまりの作業の遅さに逆上され、お馬の前を横切った童女を・・・ぶ、無礼討ちにお斬りになりました！」
「なんだって！」
「・・・お殿様はすぐお戻りになりましたが、界隈の百姓が呼応して集まりはじめ・・・このままでは」

大祐は刀を取るとすくと立ち上がった。鈴太郎を見て、
「鈴殿・・・儂は行かねばならぬ」
その目には並々ならぬ決意があった。
「兄様！鈴も行きます！お側を離れません！」
ぺたと座る次郎兵衛に、
「お前はここに居ろ！死にたくあるまい」
二人はどかどかと出て行った。残された次郎兵衛は鈴太郎が飲み残した茶碗を取ると、その飲み口をわざわざ手前に回して美味そうに飲んだ。ふうと息を突くと、
「やれやれ・・・とんだ災難だわい。帰ってかかあと別れを惜しんでくるか・・・」

大祐と鈴太郎は塚本家に走った。鈴太郎は横を走りながら、
「兄様・・・どうされるおつもりですか？武力では・・・」
「儂の命をくれてやりに行く」
「えっ？」
塚本邸はものものしく警備されていた。奉公人が夜というのに召し出され、門前の警護人は襷（たすき）を掛け袴の股立ちを取り、大小を差して槍を持っている。

式台を登ると家老の堀部善太夫が声を掛けた。
「若様！」
「父上は」
「今、お休みになられました。帰られた時は大層な御興奮で、屋敷を固めよと大声を上げられて・・・」

「月夜野村の者達は？」
「物見の話では、大勢の百姓が庄屋の家に集まっているそうです」
　みるからにおろおろしている。
　百姓が集まって、その次ぎに何が起こるかを考えたくないらしい。当事者の当主は寝てしまっている。実際は、恐怖の為に、夜具という身近なものの中で現実を逃れようとしているのではないか。
　下手に狼狽えても信利など当てになるわけがない。蒙昧な指導者というものはここまで国を傾けるものか！

「馬を二頭持て」
　善太夫は仰天した。
「ど、どこへ行こうと・・・？」
「三頭じゃ」
　その声に見ると、中庭に腰に大小、背中に大槌をしょった次郎兵衛がいた。背が低いががっちりした体格で蟹の様な顔をしている。
「お前は！下人のくせに！」
「善太夫殿、儂とて武士の端くれ。死にに行く者に少しは良い格好をさせろや」
　次郎兵衛はがははと笑った。大祐は呆れた顔をしたが相好を崩した。鈴太郎は二人の表情に思わずくすと笑った。

　三騎は風に乗って駆けた。蒸し暑い夏だがこうして駆けると気持ちが良い。
　政所の庄屋の家に近づくと、大勢の竹槍を持った百姓が出てきた。竹槍を一斉に三人に向ける。月の光に、先ほど割った竹の切り口が不気味に光った。植物でありながらその威力は凄まじい。鋼の槍と違ってその太さの竹が難なく体を突き通す。

　次郎兵衛は大刀の鞘と柄を握り絞め、がたがたと震えている。
「儂は塚本舎人の息子、大祐じゃ。父が手を掛けにし童（わらべ）の弔いをしに参った」
　百姓達の憎しみの声が襲いかかった。鈴太郎も死の覚悟をしていた。
　大祐は馬をゆっくりと進ませた。手綱を右手で胸の前に握り、左手は刀の鞘の下、太股に付けている。戦意が無い事を示していた。その目は悲しげに、庄屋の玄関口に佇む初老の男に向けていた。

「庄屋の松井市兵衛で御座います」
　大祐達が馬を降りると市兵衛はぺこりと頭を下げた。そして中に導いた。
　広い土間を上がるとすぐ居間になっている。そこには大きな布団に小さな骸が、顔に白い布を掛けられて寝ていた。
　その後ろにいた女がすくと立った。そして鬼の様な顔で大祐に言った。
「何をしに来た！人殺しめ！こんな小さな女の子を・・・お前等は悪鬼じゃ！地獄へ行け！」
　亭主らしい男が慌てて女を止めに来た。しかし母はそれを振り切って亭主を叩き出した。
「お前は・・・！悔しくないのか！犬畜生みたいに娘を殺されて！」
　その目からはぽろぽろと涙が転げ落ちる。

　大祐は刀を右に持ってその場に正座した。女はびっくりして睨み付けた。大祐は母に向かって手を突いて深々と頭を下げた。
　侍が頭を下げるなど、思っても居なかった百姓達は互いに顔を見合わせる。
　大祐が腰から脇差しを鞘ごと抜いた。そしてそれを母親に差し出した。
「・・・これで私を好きなようにされよ。父の罪は補う事が出来ないのは分かっている。私がそなたに差し上げられるのはこの命だけだ」
　母親は、震える手で脇差しを受け取ると抜いた！
　百姓達がどよめく。
　女は両手で切っ先を大祐に向けた。ぶるぶると手が震えている。
　大祐は喉を晒すように顔を上げて目を瞑った。後ろの鈴太郎は思った。
（兄様・・・私もお供します）

「ああ・・・ああ・・・！」
　女は幾度も大祐を刺そうとしたのだろう。
　足を大祐に向かって一歩踏み出すが、またよろと後戻りする。そして遂にぺたんと崩れると、脇差しを放りだして号泣し始めた。亭主が駆け寄り一緒に泣いた。

　大祐は再び頭を下げると、童女の骸の前に行き、布を取ってその顔を見た。眠っているようだった。
　父がなした所行を自分のことのように悔いた。この先、生きて帰ったとしてどうすれば良いのだ。

　朝もやの中を大祐達は庄屋の家を出た。市兵衛に語った。
「・・・儂の父の時代ももう長くはあるまい。失脚するは目に見えている。儂に何が残るか分からぬが、それをあの夫婦に全てやる。これは金丁じゃ」
「貴方様の様なお武家様が、まだいらしたということをはじめて知りました。この沼田は真田昌幸様のご善政を忘れてはおりませぬが、同じ一族のお殿様が何故、ここまで領民を苦しめるのかと不思議でなりませぬ。米の一升を測るにも多めに計上なされ、田を検地するも畦まで入れて、それに税が課せられる」
「言葉が過ぎるぞ！市兵衛」

　市兵衛は頭をすと下げた。
「・・・百姓は土に居着くもの。その生活を守ってくれる領主様に収穫を貢ぎます。どなたが支配されようとも、お天道様が毎日輝いてくれて、全うに測って残ったお米が食べられればそれで良いのです」
　大祐は市兵衛の顔を見た。しかし、市兵衛は顔をお辞儀をするように下げたままで話している。
　その体からは岩よりも硬い意志が感じられた。

三人は無事に塚本家に帰った。

善太夫は拍子抜けしたようにその場に座り込んだ。
大祐は父に諫言しようとしたが、舎人は病気と言って誰にも会おうとしなかった。元々、十五の元服の時から屋敷内でもあまり顔を合わせる事が無くなった父子であった。亡くなった母をこよなく愛したという。それだけで父を守ろうなどと決心した自分がおかしかった。
次郎兵衛に心付けをやり、家に帰した。その蟹のような顔が精悍に笑った。この男は信じられる。
少し休もうと鈴太郎を伴って自室に入った。命を捨てて付いてきてくれた可愛い人を胸に懐いて眠ろうと思った。

お互いに背を向けて部屋着に着替えた。
大祐が振り向くと、そこには全裸で髪を解いた鈴太郎が立っていた。
「鈴・・・それは」
「大祐様！」
鈴太郎は大祐に抱きつき、顔を上げて大祐の口を請うた。鈴太郎の左手は大祐の股に差し入れられ、その一物を撫で上げた。
「抱いて下さいませ」
「良いのか」
「大祐様は・・・私には勿体ないほど素晴らしいお方。こんな私と契って頂けますか？」
「嗚呼・・・鈴。儂は遂に見つけた。お前という愛しい者を」
二人は激しく絡み合った。

お互いの肉体の隅々を吸い、その匂いを確かめ合った。鈴太郎の白い肌の下には激しく脈動する血管が妖しく浮き、その肩の傷は深紅に染まった。三十朗に愛され、大きく勃つようになったその胸の飾りは、大祐に囓られ透明な甘い露を出し始めた。
艶めかしく蠢く鈴太郎の汗ばんだ肉体の中に、疲れを知らぬ大祐が入って行く。
死を覚悟して、忘れていた体内の精虫が目覚め、大祐のそれを限りなく滾らせていた。
だが、大祐はまぐわいに没頭する反面、頭の片隅に冴えた意識があった。
（儂の決死の覚悟の弔いが鈴の心を捕らえたようじゃ。儂は本当にあの母子に謝ったのだろうか・・・儂は父を守るという名目で行動しただけではないのか？・・・そうだ、儂の心身がまるで稽古の組太刀を行うように独りでに動いた？）
大祐は、新陰流に潜む奥義と恐ろしさを垣間見たような気がした。
そして最後の愛の瞬間に向かう時、ちらと市兵衛の顔が浮かんだ。何かを為そうとしている意志の顔！だがすぐに消え去り、鈴太郎の喘ぐ声が聞こえた。
そして周期的に訪れる快感の突き上げに昇天していった。

熱情が収まった後、二人は眠気に誘われるまま、一つの夜具に抱き合って横たわっていた。鈴太郎が大祐の懐から囁いた。
「大祐様のお父上は何故、他の大身の御家老様達を押しのけてご出世されたのですか？」
大祐は睡魔のためになかば虚ろとして応えた。
「・・・御屋形様（信利）のご寵愛を頂き、その御夢をかなえさせ申したいと言うのが口癖じゃ

った・・・」
「夢？」
「今は別れてしまった松代真田藩を統一し、権現様（徳川家康）に安堵された旧領に戻したいとの夢じゃ」
「・・・でもそれがかなわなかった今、何故にこの様な民百姓を苦しめるような所行をされるのでしょうか？」
「何が言いたい」
　大祐の頭が冴えてきた。
「金奉行の宮下様が私腹を肥やしているとの城下での噂が・・・」
「それで」
「御父上様もそれに荷担されているという噂も・・・」
　大祐は鈴太郎を胸から離しその顔を見た。
　鈴太郎ははっとして、
「申し訳ありません！出過ぎた事を！・・・噂を聞いた時、そんなことはあり得ないと思いました。・・・大祐様を見ればそのお父上のことも分かろうというもの！」

　鈴太郎は必死に言って、また大祐の胸にすがってきた。
「許してくれますか？」
　鈴太郎が甘えるように言う。
「許して頂けなければ死にます・・・」
　大祐は頭を振ってこの会話を忘れようとした。そして鈴太郎をしっかと抱き込んだ。

営みの後、夜まで二人でぐっすりと眠った。
そして遅い夕餉を二人で水入らずで取っていた。
すると女中が来て、大祐に手紙を渡した。誰からか分からぬが、百姓の様な者が門番に託していったという。

塚本大祐様
まことのもののふ
お父上様への御孝行の心
我が孫娘のおとむらいへの
せめてもの御礼に
明朝立つことをお知らせ申し候
死ぬも生きるも早いか遅いか
それは道しるべの石の如くなり

狂夫　百姓

大祐はそれを読むや立ち上がった。鈴太郎が落ちた文に目を走らせる。
「兄様！・・・これは・・・」
「鈴・・・これで帰れ！」
鈴太郎ははっとして、
「なりませぬ！行っては」
大祐は鈴太郎を睨んだ。
「儂は・・・沼田藩の藩士じゃ！為すべき事をする」
「・・・私もお供します」
鈴太郎の目から火花が出たような気がした。愛する者が熱い信念の塊となった。
二人は見つめ合った。
お互いの愛を回顧しその幸せを反芻し、そして決別するように。
「よかろう」

二人は再び馬上の人となった。だがそこには慈しみ合った恋人達の会話は無かった。
月夜野の郷の入り口に着いた時は空が白みかけていた。郷から利根川または街道に出る村境で二人は馬を降り、襷を掛け、刀を調べた。
無言であった。

半刻ほど経った。
靄（もや）の中を誰かが歩いて来た。
袴を履かず股旅姿で、腰に大脇差しを差した市兵衛であった。
道を塞ぐように、戦いに挑む姿で佇む二人を見て、市兵衛はにっこりと笑った。
「やはりお父上様への御孝行をお選びになりましたか・・・」
大祐は言った。
「違う。お前を行かせれば沼田藩が危うい。だからどうしてもここを通るというならお前を斬らねばならぬ」

　市兵衛はしばらく大祐を微笑みながら見ていた。もののふを讃えるように。すうと息を吸って、
「その沼田の領民の為に私は行かねばなりませぬ」
「幕府への直訴は御法度と知ってか！」
　鈴太郎ははっと大祐を見た。
「直訴が成功してもお前の一族は獄門磔（ごくもんはりつけ）になるぞ！」
「はい・・・妻にも良く言って参りました。だが、私も庄屋の責を負う者。皆の為に死す覚悟はついております」
「良く言うた。それが男ぞ」
　大祐は腰の長船祐定の鯉口を切った。
　市兵衛も、荷物を放り出すと柄を握って身構えた。先祖は真田家に仕えた郷士だったのだ。

　その時、市兵衛を守るように、鈴太郎がゆっくりと大祐の前に進み出た。

「鈴・・・いや、柳生鈴太郎殿か。儂の邪魔をするか」

　鈴太郎ははっとして大祐を見つめた。
　大祐が鈴太郎の腰の刀を見ながらまた言った。
「その鍔の紋様は地楡（ちゆ）に雀・・・こうして相対してはじめて分かるとは」
　鈴太郎は左手で柄を逆に握り、鍔を少し上向けにして自分に見えるようにした。鍔の表をちらと見て、
「この柳生の紋をご存じでしたか・・・いかにも私は柳生列堂の妾腹の子で御座います」
（作者注、この頃の江戸柳生家は『二蓋傘』を使用していた）
「幕府の隠密か」
　大祐はすらと大刀を抜いた。

「いえ・・・でも沼田領の悪い噂を心配された老中、大久保忠朝様に、様子を探って来いと言われました。また傷を癒すためにもと・・・」
「その傷の話も偽りであろう！」
　鈴太郎は必死の顔になって言った。
「違います！嘘ではありませぬ！」
「信じられるか！お前の何もかも！」
　鈴太郎の目から涙が流れた。
「市兵衛殿をお斬りになれば人の道に反します。どうか思いとどまり下さい！そうして頂けるなら、この後、どのような事が起ころうとも、私は貴方のお側にお仕えし、貴方のために一生尽くします！」
「儂は人である前に沼田藩の禄をはむ者だ」
「貴方はご存じの筈！これは義に反します！」
　大祐は目をかっと見開いて叫んだ。

「問答無用！」
　鈴太郎は大祐の殺気に飛び下がり、大刀を抜きはなった！

　市兵衛は、道の脇で成り行きを見届けようとしていた。百姓の娘の為に、命を捨てて弔いに来た大祐に礼を尽くそうと考えていた。鈴太郎様が勝たなければ自分は大祐様に斬られるであろう。無念ではあるが、儂が最後ではない。儂に続く者が必ず居る。
　ここには三つの『義』があった。二つと一つは相容れない。誰が正しいのか、そんなことはここでは問題ではない。熱い一途な者達の生死を賭けた時間であった。

　大祐は右に刀を揚げ、八相の構えとなった。その姿は麒麟の如く地を踏みしめ、一厘のすきもない。
　鈴太郎は静かに青眼に構えた。その構えにもすきはない。だが長身の大祐の圧倒的な力で繰り出される最初の一撃を躱すことは、並大抵の事ではない。それに打ち乗り、防ぐのと同時に攻撃しなくては、非力な鈴太郎に勝ち目はない。
　鈴太郎はゆっくりと左半身になり、右脇に刀を下げて車に構えた。左肩を『餌』に斬らせ必死の合撃で応酬する。

嗚呼！
対峙する二人の流儀は同じ天下の兵法、柳生新陰流！

その無心となって取った構えは、入門者が最初に習う三学圓の太刀の初太刀『一刀両段』であった！
愛し合った二人の悲しい運命（さだめ）は、邂逅したその日に演武した型を取らせたのか。

だが今は打太刀も使太刀もない。どちらも渾身の力で相手を両断しようとするだろう。
その太刀筋に打ち勝つ方法は、より早く踏み込み、精確に打ち下ろす事のみなのだ。
どちらかが必ず死ぬ、いや二人とも死ぬ可き技。これを必殺技と言わずして何をそう呼ぶか。
二人は武道の最高の奥義を尽くして戦おうとしていた。

二人が踏み込んだのは同時であった。

不思議な事に、二人の剣は道場で行っていた振り上げ方と違い、真上に剣を振りかざしていた。
古来の古武道は全て、戦場で鎧兜を纏った姿を前提にしていた。だが、戦国の世は去り、普段着のままで行う稽古に変化が訪れていた。兜が邪魔で、肩上にしか振り上げられなかった剣を、真上に振り上げる工夫が徐々にされるようになった。
尾張柳生では、前代の柳生兵庫が『直（つつ）立ったる』位ということで形を流儀に入れた。江戸柳生を修練した大祐と鈴太郎はそれを稽古した分けではないが、奥義に達した彼らの肉体は自然にそれを体得していたのだ。

剣が振り下ろされ、二人は間近でその目を見つめ合った。
鈴太郎の顔がほころび可愛い口が開いた。
「兄様・・・」
大祐は自分に寄りかかるように崩れ落ちる鈴太郎の体を抱いて胡座に座り込んだ。胸に鈴太郎を懐いて。
鈴太郎の左腕は肩から斬り落とされていた。

吹き出る血潮を大祐は必死で押さえた。
「鈴・・・済まぬ」
鈴太郎は大祐を見上げ微笑んだ。
「鈴は・・・幸せで御座いました。兄様にお会い出来て」
「まだ兄と呼んでくれるのか」
大祐は、鈴太郎の乱れて目に掛かった前髪を優しく撫でた。
「あの世でもお前を見つけるぞ・・・三十朗殿と争わねばならぬな」
「二人の兄様・・・いけない鈴です」
鈴太郎の右手が震えながら揚げられ、大祐の頬をなぞる。
「三十朗様に死に別れた後、鈴は恐ろしゅう御座いました。死ぬ時に独りぼっちでないかと・・・頼るお方もおらず・・・」
鈴太郎の息が弱くなってきた。

「でも・・・最後にこのように抱いて頂けた。おすがりしながら死ぬ事が出来ます。あの世でいつまでもお待ちしておりまする・・・」
　鈴太郎が笑った。そして右手が力を失って落ちた。
　大祐は鈴太郎の顔に頬ずりをして、震えるように泣いていた。

「市兵衛」
　市兵衛が横で鈴太郎を拝んでいた。
「行け」
「・・・よろしいので？」
「お前が書いたではないか。死ぬも生きるも早いか遅いか、道標（みちしるべ）の石の如くと」
　市兵衛は、残った二人を名残惜しそうに見ながら江戸に旅立った。

（作者注、「一刀両段」は、禅語録「碧巌録」にある逸話にある語。「一刀両段偏頗（へんぱ）に任す」という頌がある）

　真田家沼田領の松井市兵衛と杉木茂左衛門が幕府に直訴し、真田信利とその嫡子、信音が幕府評定所に呼び出され喚問された。

　注文された杉を調達できなかったこと、幼女を殺害した事などなど十条の罪を問われ、彼らは反論することが出来なかった。
　斯くして天和元年（１６８１）十一月、沼田藩はお取りつぶしになり、同月、塚本舎人、麻田権兵衛、宮下七太夫の権力を欲しいままにした三人は切腹した。彼らの息子達が悪名を残さず、責任を取るように説得したという。

　沼田領は幕府の天領となり、再検地の結果、その農民への税は軽減された。
　市兵衛と茂左衛門は御法度を破ったため、捕らえられその一族と共に磔獄門となった。市兵衛の刑を執行される前に幕府の御赦免状が出たが、寸でのところで間に合わなかったと伝えられる。
　彼らは沼田領の守り神として、今も当地に祭られている。

　塚本大祐は剣を捨て僧籍に入った。
　数十年後、一心に修行し名僧と謳われた。
　遂に臨終の床に就いた時、法悦の表情であった。
　最期の間際に、天に向かって手を差し延べて言った。
「鈴よ・・・いまこそお前のもとに」
　その骸の懐には、金糸の匂い袋に一房の艶やかな髪が入っていたという。

　沼田の運命に関わった悲しい兄弟の物語は、武道の華、契りの誉れとしてここに伝えん。

Sooner or later,
We all have to die.
Sooner or later,
That's Stone cold fact.
(from The Eagles)